

分かち合えるもの

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご臨席の保護者の方々もさぞお喜びのことと思います。

今日の卒業式は、いつものように「祈り」からはじまりました。しかし、今年の「祈り」には特別な意味があります。ほんの一週間前に起こった東北地方から関東地方にかけての大地震と、それに続く津波、その影響による原子力発電所の事故、この一週間は、このことが誰の頭からも離れなかったと思います。あらためて、犠牲となった方々にお悔やみの言葉を述べるとともに、被災に合った方々にお見舞いを申し上げます。

こういうときであっても、今日の皆さんは、幸せを感じていると思います。4年間の苦労が実って、一枚の卒業証書を手にし、大学卒という資格を得る、今日はそのための門出の日です。東北や東京では卒業式を中止にせざるを得ない大学もある中で、このように卒業式をもつことができた私たちの幸せを思わずにはいられません。

被災者と支援者

大学卒業は、大学院に進学する人を除いては、小学校以来の16年間にわたる「学生」という身分に別れを告げる日でもあります。皆さんの多くの方が小学校に入学した1995年は、言うまでもなく、阪神淡路大震災が起こった年でした。入学式が4月よりも遅れた人もいられるかもしれません。そして、多くの人にとって学生生活の最後である大学を卒業する2011年に、また大きな地震がニュージーランドと東日本で起こりました。

もちろんこれは単なる偶然でしょうけれど、16年前には、被災者であり、また、まだ子どもで、自分ではほとんど何もできなかったのに比べて、今年は、一人前の大人として、また、何らかの意味での支援者として、大きな災害に向かうことになりました。いろいろなことができる可能性があります。

この大学で4年間を送り、今社会に出ようとしている多くの皆さんも、このような危機に際して、「今、自分にできることは何だろうか」と考えたのではないかと思います。

自分がつらいとき、他人がつらいとき、大事なことは自粛したり謹慎したりすることではありません。何もしないのではなく、何かすること、元気が出るような何かをすることです。災害のときにも、いや、災害のときにこそ、できるだけ明るい面を見ようようにしたいと個人的には思います。

悲しかったこと、嬉しかったこと

先週の東日本の災害に関しては、海外から、日本人の冷静さ、礼儀正しさを称賛する声が聞こえてきます。暴動や略奪が起こっていないことをほめられても何だかな、という気がしないでもないですし、略奪こそないものの、被害のそれほど大きくない東京や、被災地から遠く離れた関西でも、燃料・食料品やトイレットペーパーの買い占めが起こりました。わざわざ政府の官房長官が買い占めをしないようにと呼びかけなくてはならないということは、国内から見ても海外から見ても恥しいことでした。

その一方、いくつかの嬉しい話もありました。首都圏の運転再開直後の鉄道のホームで、整然と列をなして電車を待つ人たちの写真を見たときには感動を覚えました。また、交通がとまってテーマパーク内で客を保護しなくてはならなかったときのスタッフの冷静で適切なふる

まいが報告されていました。そこでお菓子を配給したときに、何度も並び直してもらっていった女子高校生たちがいたんですが、実は、彼女らは、待避所で待っている小さな子どもたちにそのお菓子を配っていたという話もインターネット上には流れています。国内・海外の有名なタレントや大会社も、早速多額の義援金を申し出ています。神戸からも、長田区の商店街で用意した釣り銭募金箱には、髪を染めた中学生までが小銭を入れてくれているそうです。こういう話は、もちろん、16年前にもありました。そして、人と人とのつながりもまだまだ信じられるのだなあという思いを強くします。

今回の災害に際しては、16年前に私たちが受けた全国からの励ましに応えるときだと思います。手はじめに、昨日の卒業記念パーティでも、卒業を迎えたうれしい気持の一部でも分け与えようと、会費の一部を義援金に振り向けさせていただきました。大学としても、新学期に向けて、長期的に被災地・被災者を支援していく体制を考えたいと思っています。

16年前との違い

今回の地震が16年前と大きく違うことが2つあります。津波と原発です。震源地が16年前は淡路島だったのに比べて、今回は太平洋の沿岸で、それによる津波の破壊力は想像を絶していました。原発の方も、地震そのものよりも津波により冷却装置が壊れてしまったことの影響が大きいようです。

まだ、原子力発電所で何が起こったのかがわからない段階で勝手な憶測は控えたいと思いますが、今回の原発事故のように次々とあらかじめ想定したこと以外のできごとが起こる場合には、非常に難しい判断を下さざるを得ないこともあります。そして、この不幸な事故から私たちが学ぶことも多くあります。

岐路での判断

少し話が一般的になりますが、ある時点で2つの選択肢があるとき、そして、それぞれに一長一短の結果があるとき、果してどちらを選ぶのがよいのでしょうか。一つは、確実に今のできごとを止めることができるが、大きな損失をもたらす。もう一つ、は確実にとは言えないがうまくいけば損失は小さい。そんなときに割りきって判断を下せる人は多くないと思いますが、場合によっては重大な決断をせざるを得ないこともあるでしょう。

皆さんも、社会人となって、規模は小さくても、同じような判断を下さなくてはならない岐路に立つことがそのうちにやってくると思います。あるいは、就職先を選ぶときに、すでにそのような重大な判断をせざるを得なかった人もいることと思います。

こだわらないこと

そのようなときにどうしたらよいか、残念ながら、これさえ覚えておけばよい、というような秘訣はありません。その都度、自分で考えて決めなければならないと思います。

ただ、一つだけ、こう考えたらよいのではないかと考えていることがあります。「こだわらない」ことです。最近では「こだわる」というのはよい意味に使われることが多いのですが、もともと、これは、「つまらないこと」「小さなこと」あるいは「面子」を気にするという否定的な意味をもつ言葉でした。本来の意味で考えてみると、「こだわる生き方」というのは場合によっては楽な生き方です。いちど決めたら、前例にしたがって、いつもその通りにやればよいのですから。

ここでちょっと、両手で指を組んでみて下さい。たいていの人はどちらの親指が上に来るか決まっていると思います。わざと逆にすると気持ちが悪いと思います。他にも、上着の袖を通す順番、靴をはくときに足を入れる順番、こんなことにこだわっている人もいますか？

今、何かすごくこだわっていることがある人は、その自分の「こだわり」は、実は、手を組むときにどちらの親指を上にするかという程度のものではなかろうか、もう一度考えてみて下さい。そうでないと気持ちが悪いという程度のものであるならば、時には思い切って逆にしてみてはどうでしょうか。そうしたら何か新鮮な気持ちになれないでしょうか。はじめは気持ち悪くても、慣れれば、その方が快適になってくるのではないのでしょうか。

「自分」にこだわる

こだわりを捨てて、その都度自分の頭で考えて決めることは、必ずしも楽な生き方ではありませんが、惰性に流される生き方とどちらがよいかを考えてみて下さい。こだわらず、しなやかに柔軟さをもった生き方が、結局は生き延びることにつながるのではないかと思います。

ただ、一つだけこだわってほしいことがあります。それは「自分」です。自分が自分であるために、決して譲れないもの、それは忘れないで下さい。自分にだけはこだわる、こだわって一生を送る、そうしたら、もしかしたらよりよい人生を送れるかもしれません。

最後に、震災のことが頭を離れない日ではありますが、私たちまでが落ちこんでしまっはいけません。自分たちにはパワーがある、そのパワーを分け与えるのだ、という気持ちで、こんなときではあるけれど、いや、こんなときだからこそ、今日一日を明るく、楽しく過ごして下さい。

これが今日、2011年3月19日に皆さんに対して贈りたい言葉です。